

コロナ禍での英語教育

—TOEIC®テスト対策講座の取り組みを振り返って—

藤岡美香子*

English Education in the Age of Corona Pandemic

— Looking Back at Our Online TOEIC Test Course —

by
Mikako FUJIOKA

Abstract

Our English course started seven years ago as one of the extracurricular courses officially and financially supported each year by Tokai University, Kyushu Campus. Teaching TOEIC has been the core section of this course offered continually up to now. We have several other sections as well which were offered temporarily such as reading of English newspaper and cultural association activities with native English speakers through pizza parties.

Teaching TOEIC has been the core section of our English course, but that does not mean that it has the same content throughout its practice. First, this paper will show you how we have managed to change it into an online course after the educational environment of Japanese universities was deeply affected by the corona pandemic in 2020. Then, what kind of teaching method we have used, how students have responded to it and how we evaluate our course will be explained. It can be deemed to be rather successful to some degree because of the unexpected benefits we have got from online extracurricular courses like ours. This paper will show you what is meant by these benefits and how successful our online TOEIC course is.

* 東海大学経営学部観光ビジネス学科准教授

はじめに

コロナ禍は人々の生活を大きく変えたが、学生はそれをどう受けとめ、教員は其中でどのような教育をしているのか。本稿は、学部所属の教員として学科開講科目である「TOEIC®対策英語」「観光ビジネス英語」「観光外書講読」等の外国語科目を担当している筆者が、カリキュラム外の教育活動支援プログラムのプロジェクト活動において取り組んだ TOEIC®テスト対策の指導について、コロナ禍以前と以後を対面授業とオンライン授業の実践を踏まえて、その効果や是非を比較考察したものである。

1.1 プロジェクト活動の概要

本稿でその活動をまとめるプロジェクト活動は、2014年に東海大学九州キャンパスの教育活動支援を目的に始まったプログラムに採択されてスタートした。当時の内容は、「英字新聞カフェ」「基礎英語リメディアル教育」が中心であった。その後、「異文化体験イベント」「TOEIC®テスト対策講座」等も加わり、名称や内容、形式を変えながら、2020年度まで継続された。筆者は、2015年より、英字新聞カフェのスタッフとして参加し、その後、2017年よりプロジェクト代表を引き継ぎ、TOEIC®テスト対策講座を中心に担当してきた。

1.2 TOEIC®テストの概要

TOEIC®テストは、正式名称を **Test of English for International Communication** と言い、日本での実施運営を担う「国際ビジネスコミュニケーション協会 (IBCC)」によると、日常生活やグローバルビジネスにおける活きた英語の力を測定するテストである。テストの構成は **Listening Part** と **Reading Part** があり、各 100 問を合計 2 時間で解く選択式テストで、10 点から 990 点の 5 点刻みのスコアで表示される結果は、多くの企業の採用や昇進の際の基準として用いられる他、公務員試験や教員採用試験において、英語試験の免除や加点、大学院進学時の英語試験の免除の基準として広く用いられている。日本では 1979 年から実施されるようになり、当初年間受験者が 3000 人であったものが、経済的グローバリズムが誕生し、インターネットが普及し始めた 1990 年には 30 万人を超え、2011 年以降は毎年 200 万人を超える人が受験している。

この TOEIC®テストには、公開テストと大学を中心に行われる団体受験 (IP テスト) があるが、TOEIC® IP テストが東海大学九州キャンパスにおいて実施さ

れるようになったのは、2012 年 9 月であった。英語の選択科目に実用英語検定試験の受験対策を想定した「検定英語」等の科目が開講されていたが、外国語学部のあるキャンパスでないこともあり、TOEIC®テスト対策教育に関しては後進だったと言える。2012 年時点ですでに日本国内で公開テストと IP テスト合計の年間受験者数が 230 万人を超え、一般企業の採用や昇進において 1 つの基準として広く利用されるようになっていたため、就職を意識する大学生に対する英語教育においても TOEIC®テストが大きなウェイトを占めるようになっていた。2012 年の学内での IP テスト実施以降は、基本的に春学期・秋学期各 1 回ずつ、コロナ禍により中止を余儀なくされた 2020 年度を除き、継続して実施されている。

大学においても、目に見える形で示すことができる英語力の担保が大きな課題となる中、「九州キャンパス教育活動支援プロジェクト」の「TOEIC®テスト対策講座」も、英語を主専攻としない大学生が TOEIC®テストの概要を理解し、必要な準備をする機会を増やすことが役割の 1 つであると考え、より良い形を模索しながら実施された。

2 「TOEIC®テスト対策講座」

九州キャンパス教育活動支援プロジェクトの「TOEIC®テスト対策講座」も 2020 年春からのコロナ禍により実施の有無や実施形態が影響を受けた。本章では、筆者が 2017 年度にプロジェクト代表を引き継いで以降、プロジェクト活動内「TOEIC®テスト対策講座」をどのように実施してきたかの概略をまとめる。

2.1 コロナ禍以前の「TOEIC®テスト対策講座」の概要 2017 年度：

春学期は 2 週間に 1 回、秋学期は週に 1 回対面授業を実施し、参加者約 10 名。

参加者に TOEIC® IP テストの受験を奨励し、1 年時からの早期対策スタートが可能になるという成果があった。参加者の IP テストスコアは平均点が 400 点で、最高点は 730 点。

2018 年度：

週に 1 回の対面授業を 2 コース実施し、参加者は合計 16 名。

紙媒体のテキストを使用した対面授業に加えて、eラーニングでの自学自習を試行した。6 ヶ月アクセス

可能な教材「Newton e ラーニング TOEIC® TEST 対策」を契約し、教員は進捗状況を管理。時間的制約のクリアと演習量の確保を目指した。

2019 年度：

週に 1 回の対面授業を 2 コース実施し、参加者は合計 20 名。

対面授業と e ラーニング教材の組み合わせでの実施を本格的に開始。紙媒体のテキストを使用した対面授業と 12 ヶ月アクセス可能な教材「Newton e ラーニング TOEIC® TEST 対策」を契約しての e ラーニングの併用。

結果としては、教員が講義を行う対面での授業のみに積極的な参加が見られ、e ラーニング教材はあまり効果的な利用がなされず、参加者の約半数が「役に立たない」との評価。e ラーニングの有効活用のためには、参加者にどのように利用を促し、モチベーションの維持を図っていくかが課題として浮き彫りになった。

一方、延べ約 40 人が受験した TOEIC®公開テストと IP テストにおいては、国立大学大学院への進学において英語試験が免除されるスコアの取得や学内の海外派遣留学プログラム（英語圏長期留学）合格など、対外的にアピールできるスコア取得者が生まれ、他の学生の学習継続へのインセンティブとなる成果があった。

2.2 コロナ禍のプロジェクト活動内「TOEIC®テスト対策講座」

2019 年度の実施結果を踏まえ、e ラーニングの有効な導入形態を模索していたところ、コロナ禍により、2020 年度はプロジェクト活動がオンライン形式での実施のみが認められる状況となった。

2020 年度：

春学期は学生の学内立ち入りが基本的に禁止されたため、プロジェクト活動も秋学期開始時から始動。参加希望者向けの説明会実施後、Microsoft Teams を使ったオンライン授業を開始。

リアルタイムの講義に加えて、講義録画や事前事後学習用の課題ファイルをアップしたオンデマンド形式を併用した。

週に 1 回のリアルタイムの授業を 2 コース実施し、参加者は合計 20 名。

2021 年度：

九州キャンパス教育活動支援プロジェクトには申請せず、前年度参加者の継続希望を受けて、自主的な勉強会として実施した。週に 1 回のリアルタイムの授業を 2 コース実施し、参加者は 5 名。

<テキスト>

主な使用テキストは紙媒体の *Essential Words for the TOEIC® TEST* (Barron's) とした。古家・藤岡 (2006、2008、2011) をはじめとする様々な研究でも、大学生のビジネス英語語彙力不足は明らかになっており、語彙力アップに主眼をおきつつ、リスニング、リーディング、文法の多角的指導が可能な本書を選択した。本書のもう 1 つの利点は、**contracts、invoices、warranties** といった学生にはあまり馴染みのないビジネス関連のコンテンツを重視した章立て構成になっている点である。

<指導法>

前述のテキスト *Essential Words for the TOEIC® TEST* (Barron's) を参加学生に配布し、オンラインで文法、語彙、リスニング、リーディングの指導に活用した。

各章でターゲットとなる語彙の意味や運用方法の理解を促すために、TOEIC®テスト形式の練習問題を解くことに加えて、予習用に提示した問題の解説や例文、問題文の意味解説に時間をかけ、授業の様子はすべて録画した。



図 1. 予習用教材

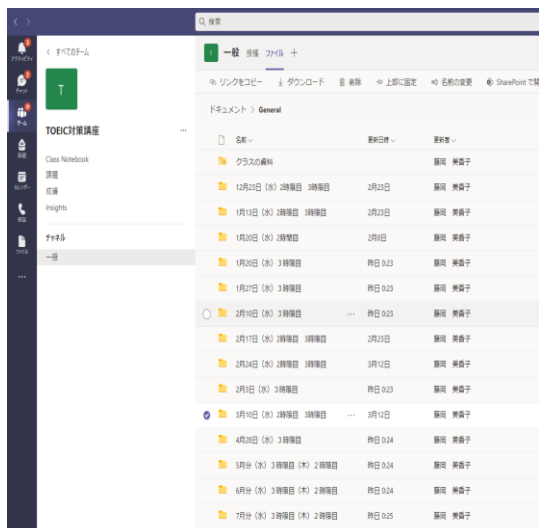


図2. 講義動画の録画リスト

<自習用教材>

各参加者が個々のペースに応じて学習が進められるよう、テキストの自習用教材を準備し、Teams にアップした。また、演習、特にリスニングの演習量を確保するために、Listening Part の練習問題にも各自取り組むことができるように提供した。



図3. 自習用教材 (語彙編)

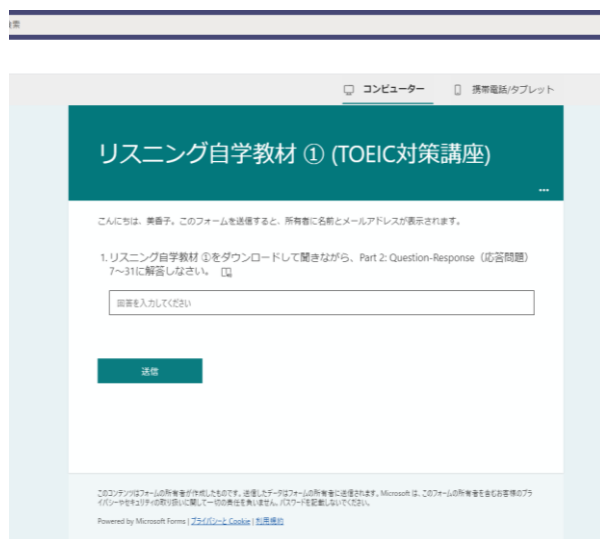


図4. 自習用教材 (リスニング編)

3 参加学生の評価

本章では、2020 年度終了時点で行った質問紙調査と2021 年春学期講座終了後の10 月に実施した聞き取りをもとに、リアルタイムのオンライン形式で行った「TOEIC®テスト対策講座」の参加学生の評価をまとめた。

3.1 質問紙調査から見えるもの

2020 年度末に「プロジェクトの感想」「プロジェクトへの要望」「プロジェクト参加継続意思」「TOEIC®テスト受験の結果または受験予定」などについて、自由に記述してもらった質問紙調査を実施した。参加者の回答を分析すると、以下の項目にまとめることが可能である。

1) 個々に合った指導

「1 人 1 人に合わせた指導」が好評であった。少人数で実施され、また自学自習用の教材を多くアップしたことで、参加学生が自分のレベルや TOEIC®テスト対策に使える時間に応じて学習を進めることができたようだ。また、ビジネス英語とは何か、語彙の重要性、TOEIC®テスト対策のコツや考え方などを、それぞれが自分の現在のレベルに照らして「知る」機会にもなったようだ。

2) 録画の活用

学科の授業と重なり、リアルタイムの講座に参加することはできなかった学生も、週末や時間に余裕がある長期の休みに録画を活用し、集中的に TOEIC®テスト対策の学習ができたようだ。

3) 自学教材の活用

「自学教材+指導による効果」を指摘する声があり、リアルタイムでの教員による指導と、その前後に利用できる Teams 上に提供した教材を用いた自学の組み合わせが好評だった。

4) カジュアルな学習環境

「周囲に刺激された」という指導者にとっては少々意外な点が、評価された。オンラインでの実施のため、実際に同じ場所で講義を受けたわけではないが、目標を同じくする仲間の存在を画面越しに意識し、刺激を受けたことが励みになったケースや苦手意識が軽減されたケースがあったようだ。

5) 英語力アップ

コロナ禍による TOEIC®テスト受験機会の喪失や減少があり、本講座開始から質問紙調査実施までの期間に受験できた参加者は、1 名のみであった。経営学部所属の当時2年生の学生で、2019 年度からプロジェクトに参加しており、1 年前の受験結果と比較して 130 点アップの 570 点という結果であった。

他には、「週1回というペースで、通常授業と両立しやすかった」という声もあり、参加者からはおおむね好評を得て、次年度の実施と参加の継続希望が 90%であった。

3.2 聞き取りから見えるもの

2020 年度 9 月から 2021 年 7 月まで継続して「TOEIC®テスト対策講座」に参加した学生 3 名に、2021 年 10 月に聞き取りを行った。実施時点での所属と学年は、学生 A：経営学部2年の女子 学生 B：農学部2年の男子 学生 C：農学部2年の女子である。全員2年生であり、対面形式で本講座を実施していた2019 年度までの講座の経験はない。本講座そのものの評価、感想を幅広く聞き取りしたが、その中で、本講座をリアルタイムのオンラインで行ったことについての感想と、本講座に限定せず、対面授業とオンライン授業それぞれの利点と課題に関するコメントを紹介する。

学生 A

オンラインと対面授業を比較して

「オンラインの授業だと、最初自分で解いとくじゃないですか、で、間違えたところを解説していただけるので、復習になる。自分がわかるところは聞き流し

が多くなる。集中して聞くとところと流すところと聞き方にメリハリをつけて授業を聞ける」

「オンラインだと録画が残るんで、あとで聞き直しができます。連続してわからない問題があったときなんか、説明を聞きながら理解しようとしていると、次の問題がいつの間にか終わってしまっている。なんかそんな感じで、よく聞き直しました」

学習効果

「オンラインのほうが準備や移動の時間がないじゃないですか、その時間で復習とか予習もできる。そう考えたらオンラインのほうが時間を有効に使えるし、楽なのかなと思う。あと、オンラインだと、携帯もあるし、すぐ辞書とか使ってわからないところを調べられるし、楽」

「対面授業はテストがある科目が多くなって、テスト前は学習時間が増えるけど、予習はオンラインのほうがやるので、それを考えると全体の勉強量は同じくらいになる気がします」

「どっちのほうが力がつくとかは、やっぱ、対面だったらやる気度が上がるんですけど、オンラインだったら参考書とかも周りにあるから、わからなかったら調べられるんで、そこもやっぱ半々な気がします」

質問しやすさ

「やっぱ、オンラインも少人数じゃないとやっぱその時に質問しにくいし、対面もやっぱ大人数だとしにくいんで、結局授業終わりにどっちも聞くことになるので、対面かオンラインかっていうより、人数がどうかで違うと思います。TOEIC 講座は少人数だったので、わからないときにその場で聞きやすかった」

成績評価

「オンライン授業における成績評価は、頭がえらいとかどうかじゃなくて、やっているかどうか（に対する評価）。力の差とかあんまり反映されない」

学生 B

本講座の成果：英語力アップ

「リスニングがすごい伸びたんですよ。リスニングが伸びすぎて、リーディングがやばいって思ったんですけど。リスニングの時が覚醒したみたいな感じで、すごい聞こえたんですよ。『自分どうした?』みたいな。最初の 50 問くらい、パート 2 とパート 3 のところ、覚

醒して、わかるわかる！みたいな感じで、あそこで点数稼いで」

「半年前(2021.3)に受けたTOEICより100点上がった。リスニングが大きかった。80点ぐらい上がった」

「あと、パート3とパート4の質問文を訳すのが速くなりました。あの、先生が、まず音声を聞く前に(問題文の意味を)確認するんですよ。で、マンツーマンだから、もう問題文をじっくり見てる時間がないので、鍛えられました。毎回やるんで結構力ついたな〜と春学期の後半くらいから実感がありました。講座でやったことがスコアにつながっていると思う。あと自信がない問題をいつまでも悩まないで次に進むっていう癖もついた」

オンラインと対面授業を比較して

「画面越しではあるけれど、家庭教師みたい。本当に個別指導のマンツーマン、満足度100%。あとは(TOEIC®テストで)点を取るだけ、みたいな」

「自分は先生とマンツーマンだったんで、マイクもON、カメラもONで、ずっとテキスト見ながらしゃべりっぱなしっていう形だったんで、ほぼ対面と同じっていう感じでした。10人くらいいると、自分が当たっていないときにはだらけたりとかあるけど、ずっとフル回転で全然そんなことはなく、集中力もキープされて。100分以上のときもあったんですけど、ずっと問題解きっぱなしみたいな感じで。授業の中で一番頭が働いていたと思う」

「でもやっぱ、一人はちょっと寂しかったですね。間違えたときに、こうだと思えますって言ってくれる人が1人は他にいと嬉しいなっていう気持ちはありました。前学期は4人いたんで、分担して進んでいったけど、1人だと自分は予習をきちんとしていたこともあって、そのペースでどんどん進んで、前と比べてカバーする分量も全然違いました」

「(他の授業で)対面の良さは、先生がいきいきしていること。先生が、オンラインだとパソコンの前に座っているじゃないですか、それでパワーポイント動かしながら説明するんですけど、対面だと、スクリーンを下す棒を使って、ノリノリで授業やって、オンラインでは話せないようなこともいきいき話して、楽しいな〜と思う。先生が生き生きしていると学生も盛り上がりあって授業が楽しくなるところはある」

学習効果

「テストをする先生の科目は、復習して復習して、むっちゃ勉強して知識がついたんですけど、他の(テストがない科目の)知識はあまり残らなかったですね。人間だな〜みたいな」

「テストがある、せっぱつまと人間って本領発揮みたいなどころがあるんで。これ(TOEIC講座における状況)も同じ感じですよ。答えなきゃ〜みたいな」

「対面授業はテストができる、テストがあるから学生も勉強して知識が身につくとか、頭に残りやすくなると思う。オンライン、特にオンデマンドの授業は、楽しくなかったり、知識が頭に残らなかったりする」

学生C

本講座の成果：「知る」

「(この講座は)レベルが自分にあっていた。知らない単語がほとんどだったので。ビジネス系の単語ってまず意味から調べて、これどういうことだろうってやっていくので、知らないことだらけだったので、学ぶ意味みたいなものを感じた」

「(TOEIC®テストを実際に)受けてみて思ったんですけど、いつも練習していることが使われているというのがわかった。一回受けてみて、自分がどうで、これからどうやって勉強していくかちょっとずつ見えてきてよかったなと思う。今回TOEICのスコアは悪かったんですけど、これ受けてなかったら単語も知らないし、もっとひどかったと思うし、これはすごいためになってよかった」

オンラインと対面授業を比較して

「遠隔だと、なんかちょっと不安だったところも見直しとかできるし、パソコンの充電が切れて途中で途切れたりしたこともあったんですけど、録画で見直せたり、振り返って聞けたりするところがやっぱりよかった」

「ただ、家で聞いていると、リラックスしすぎて、誘惑とかもあるし、聞いててもなかなか頭に入らないときもあった。もうちょっと自分の中で気合い入れてやらないといけないなと思いました。自分の気持ちの持ちようなんですけど」

「少人数だとオンラインでもわからないところを聞けるんですけど、オンデマンドだと質問がしにくい。メールで質問の内容をうまく伝えるのがけっこう難し

くて、ちょっと大変で、それだったら自分で調べるほうが早いのかなって思っちゃう」

「学び」の実感

「遠隔になると、ちょっと課題が多くて結構大変だったりするので、1 回分の授業を、課題をこなすためにだけに授業を聞くような感じになるところがある。課題に関する部分だけはしっかり勉強して知識も入るんだけど、授業を受けた感覚がちょっと少なくなっちゃって。ただ自分で勉強するっていう感じで、教えてもらっている感覚は薄くなってしまふ。幅広い学習っていうのがちょっと薄れちゃう感じですね。学びたいということよりも作業を与えられている感じがする」

「遠隔の中でも、リアルタイムで発信してもらえるものはほとんど対面と変わらないんで。ぜんぜん自分の中では対面寄り。リアルタイムのオンラインが対面とオンラインのいいところが全部ある。なんか学んだ〜って本当に思えるのはリアルタイムか対面かって自分は思ってます」

本講座の今後について

「この講座を（今後）対面でやるっていうことに別に抵抗はないんですけど、自分がとっている単位がいっぱいいっぱい、対面に変わることはいいんですけど、ちょっと大変かなっていうのはあります。オンラインで録画があって、というほうが学科の勉強と両方やりやすい。前はこんなに TOEIC が大変っていうのがわかってなかったんで、もうちょっと力を入れてちゃんと自分の中で学ぶ意識をしてやりたいって考えると録画を利用させてもらって参加するのがいいのかなって。結構対面に近いし」

4 考察と自己評価

コロナ禍は社会の様々な側面に変動をもたらしたが、学校の教育現場の変動は疑いもなく大きな社会現象のひとつである。コロナ禍の教育というテーマの本は、大学の教育現場に限定しても、従来の対面授業を守ろうとして書かれたもの、オンライン授業への転換による大学の未来を大胆に予測するもの、豊富な教育学の知見を通して教育現場の変動の教育学的意味を探ろうとするものなど、これまで様々な本が出版されているが、その中でも筆者は『オンライン授業で大学が変わる』（大空出版）に注目した。対面と遠隔の論争の中で、それは「二者択一の思考」を捨てて、「オンライ

ン化によって大学で何がおきているのか」を大学教員や学生の生の声を通して、わかりやすく解説している。ミネルバ大や東大など先端的な大学の教育現場も紹介しているが、大衆的なレベルの大学を主に取り上げることによって、多くの大学の教員や学生にとってより身近な解説本となっている。筆者は本の中で指摘された「オンライン化がすすむ大学の問題点」に準拠しながら、自分の実践したプロジェクトの評価と考察を試みた。（）内は、堀（2021）におけるページを示す。

「オンライン授業の予習や授業録画の意義」（p. 62）

筆者が実施した「九州キャンパス教育活動支援プロジェクト」の「TOEIC®テスト対策講座」では、欠席者や通常授業と重なりもともとリアルタイムで参加することができない学生も、録画された講義動画を見ることで TOEIC®テスト対策の学習を継続することができた。2019 年度までは、欠席者に対して補習的指導が十分に行えていなかったが、録画を活用することで参加者の学習意欲の維持や自律した学習者の育成につながるという実感を持った。

また、学生 A と学生 C のコメントにあるように、アップされている資料や録画を活用して、予習・復習がよりしっかり効果的に行えたようだ。

「対面のできるものとオンラインのできること」（p. 75）

学生 A は、オンラインの場合、移動や外出の準備にかかる時間を有効活用して学習ができる点と自分の周りを自分が一番学習しやすい環境にカスタマイズできる（参考書や辞書を手元に広げ、スマホ等での情報検索も随時行う）という利点を指摘している。一方、対面授業における緊張感や集中力も学習効果を上げる一要因であることは間違いなく、これは、学生 C が自宅で受けるオンライン授業は、対面授業と比較して集中力が落ちる傾向があると指摘していることから裏付けられる。

また、多くの教員が実感していることだが、学生の反応や理解度を見ながら授業を進めやすいのは対面授業である。また、学生 B の指摘にあるように、対面授業のほうがより生き生きとした活気ある授業になりやすい。

オンラインでありながら、対面と変わらない感覚で講座に参加していたという学生たちの感想からも、本講座はそれぞれの利点を両方活かすことができたと思

える。

「オンラインで質問の時間を取る」(p. 103)

「オンラインでの学生とのコミュニケーション」
(p. 119)

質問の時間を取ることは大切だが、学生Aのコメントにあったように、履修者が多ければ対面授業の場合と同様に他の学生の前では質問しにくい。大人数の授業においてはチャットやメールなどを利用して教員と各学生が個々にコミュニケーションをはかれる時間や方法の確保が不可欠であるが、学生Cがコメントしているように、これらの方法でのやり取りには煩雑さを感じる場合もあるようだ。少人数で実施できた本講座においては、オンラインではあったが、授業中に随時質問をするという理想的な形をとることができた。

「少人数・同時双方向型のオンライン授業の効果」
(p. 198)

リアルタイムのオンライン授業を少人数で行うと、学生Bのコメントにあるように、対面とオンラインの違いを感じないほど臨場感と緊張感があり、教員と学生が密にコミュニケーションをとりながら授業を進めることが可能であることがわかる。学生Bは、授業への満足度も高く、TOEIC®テストスコアの上昇という目で見える学習効果も出ており、少人数・同時双方向型のオンライン授業の効果が最大限に発揮されたケースと言えるのではないだろうか。

「学生間の横のコミュニケーション」(p. 204)

質問紙調査では「周囲に刺激された」という指導者にとっては少々意外な点が評価された。オンラインでの実施のため、実際に同じ場所で講義を受けたわけではないが、目標を同じくする仲間の存在を画面越しに意識し、刺激を受けたことが励みになったケースや苦手意識が軽減されたケースがあったようだ。

また、学生Bが聞き取りにおいてマンツーマンの手厚い指導に満足しつつも、「一人は寂しかった」と発言している点からも、個々の目標達成のために参加しているカリキュラム外の講座であっても参加者にとって仲間の存在が有意義なものであることを示している。

前出の「少人数・同時双方向型のオンライン授業の効果」というポイントとも合わせて考えると、マンツーマンではなく「少人数」のほうがより効果的だと言えるのかもしれない。

まとめ

2020年春からのコロナ禍により必要に迫られて導入されたオンライン授業ではあるが、従来の授業と同等か、それ以上の成果を上げることができるのではないかと評価されつつある。その中で、河村(2021:95)も指摘しているように、オンライン授業の課題の1つが出席の扱いであり、また、公平公正な成績評価の方法でもある。これらは、多くの教員が頭を悩まし、試行錯誤している課題であるが、カリキュラム外で実施され、参加者が自らの意思で受講することを選択している本「TOEIC®テスト対策講座」においては、教員も参加者も出席や成績評価の方法や公平公正さに悩む必要がない。本稿で試みた、コロナ禍での教育活動支援プログラム「TOEIC®テスト対策講座」の検証では、ほぼオンライン授業のメリットのみを享受できていると言える結果であった。参加者の学習意欲の問題もあるが、オンライン授業は、本講座のような任意で参加する、少人数の授業により適しており、その利点を最大限に発揮すると言えるのではないだろうか。今後、対面授業とオンライン授業がそれぞれの利点を活かし、より適切な活用方法を考える際に、本検証の結果が1つの参考になることを期待する。

参考文献

- 荒木瑞夫 (2021) 「コロナ禍の大学英語教育における ESP : 大学英語教員による共同報告」『ESP の研究と実践』13 pp. 30-45
- 大橋稔 (2021) 「2020 年度オンライン授業実践報告 : 今後の英語教育を考える手がかりとして」『城西大学語学教育センター研究年報』13 pp. 22-30
- 河村昌子 (2021) 「新型コロナ禍におけるオンライン授業の実践とその課題 : Zoom を活用した英語教育実践の一例として」『人文論究』90 pp. 89-96
- 佐藤明彦 (2020) 『教育委員会が本気出したらスゴかった。—コロナ禍に2週間でオンライン授業を実現した熊本市の奇跡』時事通信社
- 大学英語教育学会中国・四国支部編 (2021) 「オンライン授業を含むコロナ対策英語授業の実践報告集」『大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要』18 pp. 105-144
- 大学基準協会編(2021) 「座談会 日本のグローバル人材育成と英語教育を考える: コロナ禍の先を見据えて」『大学職員論叢』9 pp. 71-79
- 古家聡・藤岡美香子 (2006) 「大学生に求められる英語語彙の分析」『武蔵野大学人間関係学部紀要』第3号 pp. 75-87
- 古家聡・藤岡美香子 (2008) 「リーディングとリスニングにおける大学生の英語語彙力の比較」『武蔵野大学人間関係学部紀要』第5号 pp. 13-27
- 古家聡・藤岡美香子 (2011) 「語彙のリスニング・リーディング別の習得傾向と TOEIC スコアとの相関関係」『東海大学総合経営学部紀要』第4号 pp. 75-87
- 堀和世 (2021) 『オンライン授業で大学が変わる—コロナ禍で生まれた「教育」インフレーション』大空出版
- 三島雅一 (2021) 「言語系科目・英語必修科目 英語 e ラーニング : コロナ禍をコロナ果へ : 新英語 e ラーニングにおけるブレンディッドアプローチを用いた英語教育」『大学教育研究フォーラム』26 pp. 80-84
- 村上玄一 (2021) 『ZOOM に背を向けた大学教授—コロナ禍のオンライン授業』幻戯書房
- 森田光宏 他(編) (2021) 『コロナ禍の言語教育 - 広島大学外国語教育研究センターによるオンライン授業』溪水社
- 山内祐平(2020) 『学習環境のイノベーション』東京大学出版会